

と是川遺跡の粗製土器が同じ水準で、北陸と東北北部では土器の出来が半段階か、一段階ずれるんだ」と感じたことがあったので、上條氏の感想に素直に首肯することができた。

1997年8月～2007年3月の約10年間、筆者は愛知県安城市の市史編さん事業に携わっていた。安城市堀内貝塚は縄文晚期の桜井式を主体とする貝塚で、桜井式は北陸でいうと中屋式に並行する土器型式である。堀内貝塚を始めとして東海地方の晚期土器は、精製土器といつても粗製土器にそれほど上手でない文様を描いたもので、北陸の晚期土器と比べると出来が一段階落ちる水準である。

上記の経験をもとに、縄文晚期前半では土器の優劣に南北格差があると考えている。東北北部と北陸を比べると東北北部が優れていて北陸が劣る、北陸と東海を比べますと北陸が優れていて東海が劣るを考えている。これは取りも直さず、大地域社会（部族）間の南北格差を表したものであると考えている。格差が生じる要因としては、生業による経済力の差と、経済力を文化面に注ぎこんだことによって生じた文化力の差を推測している。

つぎに翡翠から検討していく。1987年に富山県埋蔵文化財センターで特別企画展『ひすい』が開催された。その図録の翡翠出土遺跡の分布図をみると、東北北部の出土遺跡はではわずかで、北海道南部ではほとんど皆無である。福田友之氏が2014年に出版した『津軽海峡域の先史文化研究』（六一書房）を参照すると、北海道南部から東北北部で翡翠製品が出土した遺跡がかなり増えていることがわかる。中期から後期前半では鰯節形や緒締形の大珠が出土しており、後期後半から晩期になると製品が小型化し、勾玉や小玉、管玉、垂飾などになる。北海道では日高地方に軟玉の翡翠の産地もあるが、蛍光X線分析の結果では北海道南部で出土する翡翠製品の大半は糸魚川産のようである。

後期後葉～晩期、北陸や東海でも翡翠製品は出土するが、北海道南部や東北北部に比べると出土量は少なく、北海道南部や東北北部は宝石である翡翠を引き寄せる力があったようである。翡翠からみても、大地域社会（部族）間の南北格差があったと考えている。こうした南北格差が生じる背景には、土器と同じように生業からくる経済力に差があったことと、それを文化面に注ぎこんだことによって生じた文化力に差があったことを推測している。

5. 縄文時代後晩期の地域社会間の交流

後期後葉～晩期前半、晩期後半～弥生前期の二つの時期に分けてみていくことにする。

最初に、後期後葉～晩期前半である。一つの部族が他部族を招待して集いを開催した時に、主催者が来訪者に歓迎の意を表して特産の物品を贈り、来訪者も地元の特産品を土産物として主催者に贈り、遠隔地に固有の遺物が移動したのだろうと考えている。たとえば、北海道南部～東北北部の人たちは土器や粘土、建築技術を北陸の人たちへの贈り物とし、逆に北陸の人たちは翡翠の製品や石材を北海道南部～東北北部の人たちに対する贈り物としたのだろうと推測している。すなわち、遠隔地に固有の遺物が他地域に分布するのは、特産の物品を贈ったり、受けとったりした贈答の結果であると現在のところ考えている。

つぎに、晩期後半～弥生前期である。縄文晩期～弥生前期の土器型式編年表は、東京大学の設楽博巳氏が作成したものを使っている（設楽2004）。北陸では中屋式と下野式の境界の年代が800～900 cal BCになる。これは土器型式の明確な縄文土器に付着した炭化物を試料に炭素14年代測定を行い、測定値を西暦に換算した年代で、2002年3月に発表したものである。この境界を九州北部にあてはめると縄文晩期と弥生早期の境界になり、弥生時代の開始年代は800～900 calに遡ると推測した。その後、弥生時代の開始年代はこれまで考えられていたよりも500年あまり古くなつて紀元前10世紀に遡る、と2003年5月に国立歴史民俗博物館が発表した。筆者と歴博は別々に研究をしていたに

もかかわらず、ほぼ同じ年代値になり、再現性があることが裏づけられた。

このような年代学的研究は個人でコツコツと行っていても埒があかず、歴博のような研究機関が組織をあげて行わないと進まないものである。石川県の弥生土器の煤や焦げを試料に測定を依頼しようと、2004年3月に藤尾慎一郎氏を石川県に招聘し、県内の弥生土器をみてまわり、試料を採取してもらった。同行している時に「遠賀川系の壺は贈り物として動くから水稻農耕が定着しているかどうかを考えるには外反口縁の壺が重要なんだ」という趣旨のことを藤尾氏は指摘していた。

筆者の知るかぎりでは、石川県で水稻農耕に関するもっとも古い資料は、野々市市の御経塚遺跡と三日市A遺跡から出土した糊圧痕である（山本2007）。御経塚遺跡の糊圧痕は深鉢の外面胴部に付着したもので、三日市A遺跡のものは内面口縁部に付着したものである。いずれも長竹式後半の土器で、長竹式後半の較正年代は650～500 cal BCになるので、この期間中の糊圧痕ということになる。糊圧痕は西日本から運ばれた稻糊が付着したものか、手取川扇状地で湿地稻作のような形で栽培されたものが付着したのか、これだけの資料からは言及することはできない。その決着は今後に残された課題である。また、石川県では弥生時代の始まりを柴山出村式からとしているが、糊圧痕が2点出土している長竹式後半をどのように考えるのか、従来どおり縄文時代とするのか、あるいは弥生時代にするのか、この点も北陸の研究者に課せられた課題である。

晩期後半～弥生前期でも後期後葉～晩期前半と同様で、部族間の歓待の集いの時の贈答品として遠隔地に特有の遺物が移動したのだろうと考えている。たとえば、関西や山陰人たちは稻糊を入れた遠賀川系の壺を北陸の人たちへの贈り物とし、北陸の人たちは翡翠の製品や石材を関西や山陰の人たちへの贈り物としたのだろうと考えている。

最後に、まとめとして、縄文時代後期後葉から晩期後半・弥生時代前期の交流は大地域社会（部族）間の歓待の集いへの参加や出席によるものであると考えている。その時に自部族の特産の物品を贈答品に使ったことによって、その地域に特有の物品が他地域や遠隔地に運ばれたと推測している。

引用文献

- 大塚友恵 2011 「日米の低湿地遺跡の発掘調査方法に関する覚え書き」『メタブティヒアカ』第5号、93～96頁、名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室：名古屋。
- 菅野智則・山本直人・宮尾亨・岩崎厚志・松井章 2008 「アメリカ オレゴン州サンケン・ビレッジ遺跡」『考古学研究』第54巻第4号、120～123頁、考古学研究会：岡山。
- 設楽博己 2004 「東日本と西日本の併行関係」『弥生時代の実年代』、138～147頁、学生社：東京。
- 新谷葉菜 2011 「北中米における発掘調査資料の活用事例」『メタブティヒアカ』第5号、97～100頁、名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室：名古屋。
- 立川陽仁 2016 「ポトラッチとは、ポトラッチにおける贈与とは」『贈与論再考』、72～91頁、臨川書店：京都。
- 水沢教子・菅野智則・山本直人・松井章 2013 「アメリカワシントン州 オゼット遺跡とマッド・ベイ遺跡」『考古学研究』第59巻第4号、109～112頁、考古学研究会：岡山。
- 山内清男 1969 「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史』第1巻、86～97頁、学習研究社：東京。
- 山本直人 2007 『文理融合の考古学』、高志書院：東京。
- 山本直人 2013 『縄文時代の生業と社会』、同成社：東京。

開拓移住型農耕民の土器作り民族誌 －土器作り技術の拡散と受容－

北野 博司（東北芸術工科大学歴史遺産学科）

1. はじめに

考古学では発掘した考古資料の機能・用途の推定、時間・空間への再配列、それらの変化を復元し、環境動態と関わらせながら過去の人々の行動を解釈していく。過去の解釈は自己の経験に左右されることが避けられないため、物質文化と多様な人間行動の関係ができるだけ把握しておくのが望ましい。世界的に見ても驚くほど固定的であったといわれる日本の農家（坂根 2011）を間近に見、その歴史を学んできた私たちには固有の価値観が備わっているとみたほうがよい。石川県のある日本海沿岸は縄文時代以来、様々な土器文化が行き來した。そこにどんな人間活動があったのか、土器様式の変容プロセスは何を表しているのか。

当日の発表では東南アジア大陸部の稲作農耕民の集住、移住形態や異民族の混住、流動化の事例を紹介したが、ここでは前者の要点を述べていきたい。

2. ハーナーディとイサーンの遠隔地移住

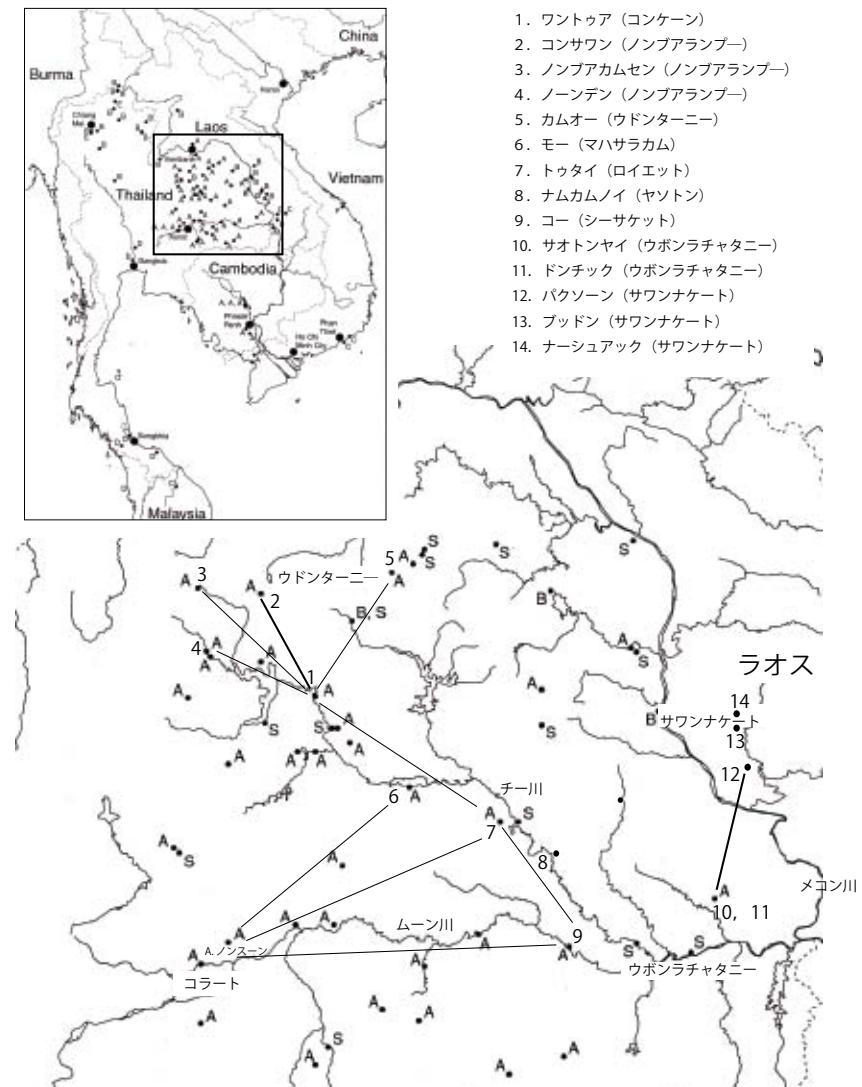
イサーンとはタイ東北部の地域、民族をさす呼称である。東南アジアの大陸部は熱帯サバンナ、熱帯モンスーンに属し、雨季、乾季という二つの季節が農業形態に多大な影響を及ぼしている。灌漑水路が整備された地域では稲の二期作が発達し、ない地域では雨季の単作となる。イサーンはコラート高原にあり、慢性的に水が不足し、干ばつや洪水が頻発する地域である。ラオスからイサーンにかけては現在も雨季の天水に頼る水田が主体をなし、地下の岩塩層の影響もあって生産性は高くはない。

現在、イサーンにある村はここ 50～200 年の間に成立した開拓村である。18 世紀末にランサン王国がアユタヤによって植民地化され、ラオ族の移住が進められた。彼らはメコン川を越えてイサーンの南東部に入り、点在する先住のモン・クメール系諸族の中を北西方向に拡散していった（林 1985）。彼らはタイ族とは異なるエスニシティをもち（タイ・ラオ族）、イサーンと自称する。

タイに入ったラオ族は移動性が高く、耕作に適した土地を求めて移住を繰り返してきた。この行動を「ハー（探す）・ナー（田）・ディ（良い）」「ハー・ティーディン（土地）・ディ」という。

その規模は 1～数世帯、時には 10 世帯以上が集団で遠隔地に移動する。それは A 地点から B 地点への一方通行だけでなく、戻る場合もあれば、数年の試住をへてまた新たな土地に移動することもある。故郷と移住先で親子、兄弟が分かれて住む場合もあり、移動形態バラエティーに富む。このような行動は目まぐるしく移動する人々と、網の目に張り巡らされた親戚、縁者のネットワークのなかで獲得される「情報」に基づいて計画的に行われる（林 1985）。ここでは現象的にみえる「定住」も、長い移動の旅の仮の姿といふこともできる。

このような習俗の背景として、気候と土地の生産性に起因する稲作の不安定性、未開の森林（未墾地）が豊富に存在することがあげられる。また、人口増加社会における家族の飯米確保、農地の相続といった事情がある。開拓移住はその解決手段の一つである。さらに、土地への故郷意識の希薄さ、豊かさを志向する上昇意識がある。土地は所有するものというよりは、水牛や牛のように使用されるべき生活の道具といった意識がある（林 1985）。



第1図 イサーンの土器作り村
(北野2014、原図檜崎ほか2000に一部加筆)

3. 土器作り技術の共通性と変容

(1) タイ・ラオの土器作り技術の移転と変容

イサーンのウボンラチャタニー県タカンブーポン郡セーペット地区、ナピン地区にはたくさんの土器作り村があった。その一つSY村は約180年前にハーナーディによって開かれた最も古い村である。その後、人口増と農地の拡大により数kmの範囲に出作り小屋を中心に、衛星的に集落が派生した。現在も土器作りが堅調なD村は、145年前にSY村から約10世帯が移動して成立した。親村-出村関係にあたるこれらの集落には共通性の高い土器作り技術が継承してきた。

一方、分村した集落からさらに各地へハーナーディが行われていった。その一つに、国境のメコン川を越えてラオス国サワンナケート県に向かう波があった(第1図10~12)。P村には、途中別の村を経由してきた人々も含め、タカンブーポン県の8村以上から断続的に入植が行われた。SY村や隣のSN村出身の女性たちは移住後も副業として土器を作ったが、近年になってその継承は途絶えた。最後のポターたちはラオスに来てから土器作りを習った世代で、その子供も土器を作っていたが近年完全に停止した。移転した土器作りは故地と共通するものの、その末期にはいくつか違いも認められ

るようになった。器種のバラエティーが減ったこと、大型品が作られなくなったこと、張りのある胴部がなで肩、下膨れ気味になったこと、故地でその後に製作が始まったかぼちゃ型土器が移住地では作られなかしたことなどがあげられる。現在も故地への訪問は続くがその頻度は低下している。なお、サワンナケート県には活発な生産を行い、供給圏が競合するB村の土器作り（第1図13、回転台使用）があるが、最後まで融合することはなかった。

この類型は稻作を主たる生業とするタイ・ラオの副業的土器作りがハーナーディによって遠隔地移転した例である。ここでは良田探しが主たる目的のため、それが成功し生活が安定すると、別の割りのよい副業に転じながら土器作りは後退していった。

(2) タイ・コラートの土器作り技術の拡散

イサーンの土器作り村の多くは、その南西部にあるタイ第2の都市コラート（現在はナコンラチャシマー）近郊を原郷と伝承する。エスニシティはタイ・コラートあるいはタイ・ブン（タイ・ベルン）と称し、タイ・ラオとは区別される。

タイ・コラートの土器作りはレファーツらがタイプAと名付けた円筒原形から2～4次の叩きにより成形する画一的な技法を共有する（Lefferts & Cort 1999）。水田保有率が低く、生計に占める土器作りの比重が高い（専業）。池の中から粘土を採取し、乾燥させずに生粘土の状態で保管する。チュア（焼粉）の粉碎を使うのは堅杵・堅臼である。マハサラカム県モー村やコンケーン県ワントゥア村、その北部に移住村が点在する（第1図1～9）。

移住の契機には人口調整、貧しさからの脱却、求職などがあげられる。生産量が多くなれば供給過多で売れない。行商時の情報、先住者の情報に基づき、良質の粘土があり、流通が希薄な土地に移住する。これらの村の住民は血縁関係で結ばれ、冠婚葬祭で現在も頻繁に相互訪問する。タイ・コラートの村はムーン川やチー川沿いに分布し、初期には舟運を利用した場合もあったが、牛車や徒歩で数日かけて移動するのが一般的だった。1960年代には車やバスを利用した例もあった。

この類型は専業的な土器作り集団が、過剰生産の抑制や販路開拓を目的として移住を繰り返すハイティーディンディといえる。専業的であるがゆえに、情報感度が高く先取性がある。行政からの支援による回転台や昇炎窯・穴窯を導入するなど生産手段の変化にも抵抗は少ない。ワントゥア村では一部の製品を販売条件のよいコンサワン村のショップまでトラックで運搬している。

4. おわりに—列島の土器文化と移住、民族

これらの民族誌は現代の東南アジア大陸部で起こった現象であり、そのまま時代や自然・社会環境の異なる列島の土器文化の解釈には直結しない。しかし、近隣、遠隔地を問わず土器文化の共通点や差異、変容から、背景にあった人間行動を理解するためには、民族誌の比較研究を踏まえたいくつかの解釈モデルがあったほうがよい。本事例は土地に縛られない流動的な稻作農耕民の姿を描き出しており、移住後も一定期間は緊密な情報ネットワークによって共通した技術を保有する点、土器作り技術継承の末期の変容などは示唆に富む。

紙数の関係で参考文献は省略した。内容の詳細は次の文献による。北野博司 2014 「タイ東北部における土器製作者の移住と技術伝播」『歴史遺産研究』No.9 東北芸術工科大学歴史遺産学科

海を越えた窯業

－須恵器から明治まで、近年の京都における民俗考古学的検討から－

木立 雅朗（立命館大学文学部）

はじめに

窯業技術は常に海を越え続けてきた。そのため、近年の窯業史研究では、日本海域を越えた東アジアの視座が不可欠になっている。しかし、その比較検討を行うためには、従来以上に列島の窯業史を綿密に抑えておく必要がある。ここでは京都の民俗考古学的検討を参考にしつつ、須恵器のロクロ、九谷の色見と上絵窯を題材にして、いくつかの見方を紹介した。

1. 須恵器のロクロを理解するために－「轆轤」という言葉の生い立ち－

古代では「轆轤」は牽引器や木工・金工の加工器具を示す用語であり、現代のように陶芸用器具、すなわち陶車として「轆轤」を使用した例は確認されない（小林 1962）。管見による限り、江戸時代以降の文献史料に現れている。その頃の陶芸用ロクロが牽引器と類似していたため、陶車を「ロクロ」と呼んだ可能性がある。古代や中世のロクロが、牽引器と似ていた補償はない。

2. 須恵器の「ロクロ復原」をめぐって

一般的な須恵器の「ロクロ復原図」では蹴ロクロがモデルとされている（たとえば潮見浩 1988 など）。しかし、陶芸史では、蹴ロクロは16世紀末に朝鮮半島に新たに導入された朝鮮式ロクロだと考えられている。唐津・薩摩・萩などの新興の朝鮮系窯業産地で導入され、現在に至っている。中世から存続した「六古窯」では、瀬戸や備前に残された手回しロクロが使用されていたと思われる。蹴ロクロは16世紀末以降に導入された最新式のロクロであり、16世紀末頃の「伝統的」なロクロは手回しロクロであった。その「伝統」が須恵器ロクロに繋がる可能性があるとはいえ、その確証はない。それを傍証してくれるのが、須恵器や中世炻器の底部外面に残る「下駄印」である（西 1986）。民俗例を見る限り、蹴ロクロでは確認できないが、手回しロクロでは軸を受ける構造上、現在でも下駄印が残りうる。

3. 須恵器ロクロの性能と技法

「ロクロ」と呼べば現代の電動ロクロや蹴ロクロの性能がイメージされるが、民俗事例の手回しロクロは惰力が小さく、常に回し続ける必要がある。近世後半にはじまる大分県・小鹿田焼では、蹴ロクロを使用していながら、大型品は板起こし技法（粘土紐巻き上げ）、中型品は玉作り（一個挽き）、湯飲みなどの小型品は粘土塊からの連続挽き上げで成形している（長田他 1998）。製品の大きさや形状によって成形技法を変えざるを得ないのである。

手回しロクロは蹴ロクロに比べてさらに惰力が小さい。須恵器ロクロの性能は未知数だが、手回しロクロと同等かそれ以下であったと想定される。須恵器杯類の製作に土殺しを行っていることは確實だが（木立 2000）、現在のロクロに比べれば未熟な段階にあったことも間違いない。そのようなロクロであったため、須恵器大甕はロクロ上で作ることができず、人間ロクロで成形したと想定される。蹴ロクロの導入を待たなければ、大甕をロクロ上で作ることが難しかったと思う（木立 2001）。

ところで、講演では触れなかったが、中世土器研究会では「回転台土師器」という言葉を使用し、須恵器ですら同様に「未発達な回転台」段階にあったと想定している（森 1994 など）。「回転台」と

いう曖昧な用語に頼ることで技術の本質に迫る視点を失っているように思える。「回転台」や「ロクロ」の概念を、多様な民俗・民族事例、実験考古学から定義すべきである。

4. 「九谷焼」の系譜と色見

加賀友禅や「古九谷」の起源の問題を石川県の外から眺めると、「お伽話の国・加賀」と言わざるを得ない。学問的手続きすら、地域ナショナリズムの強い影響下にある。九谷窯の系譜をめぐる問題も「古九谷・伊万里論争」のあおりを受けて正常な形で進められているとは思えない。九谷窯の製品の実態を物的証拠で示す必要がある。

その場合、色見は技術系譜を示す重要な指標になる。製品は模倣することが多いが、色見は技術の根幹に関わるものであり、本来、模倣するものではない。九谷窯から出土した穴あきの色見陶片（石川2007、第13・82図）は有田からは出土しておらず、中国の幾つかの窯場で出土している（熊海堂1995）。有田を経由しない、あるいは有田では傍系にすぎない技術が九谷窯に到来していると考えてよいだろう。

また、「再興九谷」の段階になると、京都・栗田焼の色見と同様のものが出土するようになる。「再興九谷」は青木木米の指導によってはじまった京焼系統のものだが、作品だけでなく、京都の窯焚きが関わったことが確実である。ただし、栗田が陶器であるのに対して「再興九谷」の色見は磁器である。栗田に対抗した京都・五条坂で磁器が焼成されていたが、近現代の五条坂の色見は栗田とは異なっていたと言われている。「再興九谷」では古い京焼の技術を保持したか、あるいは強い影響を受けながら変質したのだと想定される。

5. 「九谷焼」の系譜と上絵窯

九谷A遺跡で薪を燃料とする上絵窯、すなわち、金薪窯の基底部が検出されている。類例は有田赤絵町遺跡や山辺田窯跡で確認されており、有田と同様の上絵窯を使用していた可能性が高い。一方、京都市内では17世紀前半のうちに炭を燃料とした上絵窯、すなわち、金炭窯が出土しており、鉛釉陶焼成に使用されていた。仁清や乾山の上絵の窯はその系譜の中から現れており、有田を経由せず、景德鎮などの中国の技術が直接導入された可能性が高い。19世紀には金炭窯と金薪窯の双方を併用するようになる。京都自体が、複数の系譜を織りませていた可能性があり、それが「再興九谷」にも反映したと想定される。京都では幕末～明治初頭に金炭窯が小型化して衰退に向かい、電気窯の出現によって金薪窯も衰退して現代に至っている。上絵窯の系譜も時代によって大きく変化したのである。なお、報告では上絵窯の「明炉」について間違った解説を行ってしまった。正しくは太田能寿1938『陶説陶冶図説詳解』（国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている）をご確認頂きたい。

ところで、「九谷焼」は、近代に輸出産業として大展開を遂げた加賀の窯業が創り出した象徴的名称である。その発展が過去を「古九谷」と「再興九谷」として再解釈し、意味づけた。もちろん、それらの窯は存在していたが、「九谷焼」という概念では認識されていなかった。ある意味、「創られた伝統」である。そのため「九谷焼」



明炉（下）と暗炉（上）
(太田1938より)

の誕生は九谷窯ではなく、輸出産業の展開時期と考えるのが妥当である。「古九谷」の評価が大きく展開した時期でもある。この時代こそ、九谷焼研究が重視しなければならない、もっとも重要な時期である。お伽話に拘泥するのではなく、事実としての足元の歴史と産業を見つめなおすためにも、近現代考古学のさらなる展開が望まれる。

6. ものづくりと考古学

京都の発掘現場や工事現場では陶土が意識されずに捨てられている。そのため、それらを活用しようと考へ、陶芸家の協力を仰いだ。発掘現場・工事現場を地域の歴史資源・自然資源として活用するためである。それによってどの土がどのような性質をもつのか、多様な自然資源の状況を活用している陶芸家から教えてもらうことができた。陶芸家の目は、窯跡の盛衰を理解する上でも参考になる。まだはじまったばかりだが、「土」求める近年の陶芸家の志向は、発掘現場を開拓し、多様な視点を導入する運動に発展する可能性が高い。

考古学は「ものづくり」の分析を得意としている。「伝統工芸」の歴史を調査していると言っても過言ではないが、現代の伝統工芸とのコラボレーションは少ない。「調査の対象」や情報提供者ではあっても、共同研究者としての位置づけは一部を除けば少ない。「普及啓蒙」という上から目線の「成果還元」ではなく、住民、とくに伝統工芸に関わる人々と共に考える場を作ることができれば、成果還元の場はそのまま考古学への情報提供の場にもなる。「普及啓蒙する対象」は均質で漠然とした「住民」ではなく、多様な生業をもった地域住民であり、重要な情報提供者である。そのような多様な地域住民のためにも、地域の課題に即した幅広い歴史叙述に努めるべきである。

ただし、地域にとって不都合な事実を掘り起こすこともある。不都合な事実を永久に隠すことは不可能なことだ。利益優先やご都合主義も戒めなければならない。多様な事実をあからさまにし、すべてを抱きしめる視点こそ重要なことであり、考古学の価値を示すことにつながる。

私たちは発掘現場で「必要なもの」や情報だけを収集し、多くのものを捨てている。しかし、見過ごされたものの中には、地域にとって大切な資源も含まれている。遺跡の価値を見直し、地域や社会の中で資源や情報を循環させることができれば考古学研究はさらに深化するに違いない。

参考文献

- 石川県教育委員会編・発行 2007 『九谷古窯跡発掘調査報告書』
太田能寿 1938 『陶説陶冶図説詳解』大日本窯業協会
木立雅朗 2000 「須恵器杯類の製作実験ノート」『立命館文学』第565号、立命館大学人文学会
木立雅朗 2001 「大甕作りの民俗事例と須恵器大甕」『須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第9号、北陸古代土器研究会
京都市 2015 『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』
京都府 1872 『陶磁器説図』(藤岡幸二編 1962 『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会の別冊を参照した)
熊海堂 1995 『東亜窯業技術発展と交流史研究』
小林行雄 1962 「輶轄」『古代の技術』塙書房
潮見 浩 1988 『図解 技術の考古学』有斐閣選書
長田明彦他監修 1998 『小鹿田焼 すこやかな民陶の美』芸艸堂
西 弘海 1986 「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社
森 隆 1994 「回転台土師器の研究史素描」『中世土器の基礎研究』X

研究集会の今後の展望（座談会から）

講演終了後、谷内尾晋司氏（当センター理事、石川考古学研究会会長）を座長に迎え、今回の研究集会のテーマである「環日本海交流史調査研究の展望」について、当センターの前身時代も含めたOBである3名の講師の方々からご意見をお聞きする形で座談会を行った。

冒頭、研究集会創設時の所長でもあった谷内尾氏が日本海沿岸の埋文調査機関との交流を深めつつ、職員の研究の機会を確保するという研究集会の主旨を再確認した。そのうえで17年目を迎える研究集会のあり方のみならず、広く当センターにおける考古学研究のあり方が論題とされた。

以下、①現在の当センターの印象、②研究集会の方向性、③職員の研究への取り組みの3点について、3氏のコメントの要点を摘記する。まず①では、出土・検出事例の全国集成において、石川県の事例数が突出する分野がみられ、そのことに調査・報告に取組む姿勢が反映されているとの指摘があった。また、在野の研究団体との協働の歴史を背景とする普及面での先進性、考古資料に残された当時の技術を学ぶ際に貴重な機会といえる体験広場での土器作り・須恵器焼成などは、当センターのいわば強みであり、それらを生かしつつ今後も県民の興味関心と考古学との橋渡し役となってほしいとの要望があった。

続く②では、日本考古学の高度化・細分化という状況を踏まえ、以前のテーマを再度取り上げてみてはどうか、そうすれば新たな視点がみえてくるのではないかという意見や、地域に根ざした立場、地域からの視座を大切にするという意味でも「日本海」にこだわり続けてほしいとの意見があった。また、研究集会を支える原動力はマンパワーであり、石川県に資料が多く研究者がいるテーマを選び掘り下げていくべきであるとの意見があった。さらにこれに付随して今後、研究集会を公開するかどうかという点では、誰を対象にどのようなレベルで行うかという点をしっかり検討したうえで慎重に行うべきであるとの見解が主流を占めた。

③については、ただ発掘して報告するだけではなく、発掘を通じて磨かれた現場力（対話力・人間力）を基礎に気概のある職場づくりを進め、研究を通じた楽しみの発見、成果の社会還元に努めてほしいとの励ましの言葉があった。また、研究は自分が一体何者であるかを知ることにも繋がる営みであり、大上段に振りかぶらず、まずは「わかる喜び・見つける喜び・感動」を知る営みとして取組んでほしいとの学問の勧めがあった。

座談会は、日本海沿岸の埋文調査機関として「日本海」にこだわりながらこれからも続けていってほしいとの座長の発言で締めくくられた。

（松山和彦）

